

バロン西（西竹一）とウラヌス号物語

バロン西は、1932年（昭和7年）、ロサンゼルス・オリンピック大会でウラヌス号に騎乗し、馬術大障害飛越競技で金メダリストを獲得した。

このオリンピック大会参加に際し、参加費用はどこからも支給されない。バロン西は、馬の運搬費用も含めて、馬術チーム全体の費用すべてを支出した。

父の薩摩藩士・西徳二郎男爵（鹿児島城下樋之口町に生まれ、外務大臣などを歴任）は、駐清公使時代の明治33年に義和団の乱処理に当たり、清の西太后から中国茶の専売権を与えられ、巨万の富を築いた。米国映画「北京の五十五日」に登場する西大使は西徳二郎公使。明治34年、西公使の後任全権公使は小村寿太郎

ウラヌス号（1919年- 1945年3月28日）は、1930年4月、西がイタリアに滞在



中、馬の持ち主が、乗りこなせず売りたいがっていたことを伝え聞いて、それなら自分が乗ってみようと6,500伊リラで購入した。写真で見て分かるように、体高（肩までの高さ）が181cmもある大きな馬体で、性格は荒く西以外は誰も乗りこなせなかったという。

ヨーロッパの大会で入賞し、ロサンゼルス・オリンピックでは金メダルを獲得した。ベルリン・オリンピック（1936年）にも参加し、映画「民族の祭典」内に収められているという。

戦後、バロン西が硫黄島で最期を遂げるまで身につけていたウラヌスのたてがみがアメリカで発見され、北海道十勝本別町歴史民俗資料館に収められるという。



西竹一は、学習院幼稚園・初等科へ、明治 45 年（1912）に徳二郎が死去。その名跡を継承した竹一は当主として、男爵（バロン）を名乗る。湯長谷藩（福島）内藤政民の上屋敷跡地、麻布筭町の自宅とその周辺 1 万坪という広大な屋敷地と 50 軒の貸家、熱海と鎌倉の別荘、莫大な各種株券など巨大な遺産を相続した。大正 4 年（1915）4 月、外交官であった父の遺志を継ぎ、府立一中（日比谷高校）に入学する。同期には、小林秀雄（評論家）、迫水久常（参議員議員）らがいた。当主の竹一は、父親の後を継ぐべく外交官を目指していた。

ところが、学習院時代の乃木希典院長は、屢々「華族の子弟は、なるべく軍人を志せ」と教示していた。乃木将軍は、華美に陥り斜陽弱体化を始めていた華族社会の子弟に、精神的な覚醒を促していたのであろう。大正 6 年（1917）竹一は、府立一中在籍中に広島陸軍地方幼年学校へ転籍すると、軍人の道をまっしぐらに進むことになる。

さて、ここからは華麗なバロン西の物語

西少年は鷹揚で天真爛漫、サッパリして明るい性格であった。彼は莫大な資産を趣味に注ぎこむ。14歳でカメラに凝り、自宅に暗室を持ち、空気銃を収集する。陸軍軍人になっても髪は七三に分け、ハーレーダビッドソン、モーターボート、自動車などを所有した。当時の日本では考えられない高級車を購入して、スピードとスリルに熱中する摩登ボーイの生活を満喫していた。

少尉候補生の頃、自動車はアメリカ・リバティ社製、クライスラー、リンカーンのオープンカーで東京の街を我物顔に乗り回していた。まだスピード違反など道交法の無い時代だが、たびたび、警告を受けていた麻布警察署に職員宿舎一棟を贈呈した逸話で知られる。

大正13年（1924）10月、西男爵は22歳で陸軍騎兵少尉に任官した。同年12月27日、海軍大将川村伯爵家の令嬢武子と結婚した。長女淑子、長男泰徳、次女広子の一男二女をもうける。西家の本邸は麻布笄町にあり、千葉の習志野騎兵連隊から戻ると麻布の邸内に洋風でモダンな邸宅を建て新居とした。空いた本邸は、赴任先の英国から帰国した外務省の吉田茂大使が借家としていた。



西中尉とその家族

西家の新居で開くパーティには、外国将校団や外交官など多くの外国人が出入りしていた。毎夜のように豪遊、時には親友の毛利男爵や伊達男爵など気鋭の若手将校と制服のまま横浜本牧まで遠征していた。深夜、銀座築地川に繋留してある米国製の高速モーターボート、その名も「ウラヌスⅠ世号」、「ウラヌスⅡ世号」に銀座のホステスを乗せて、東京湾をクルージング。外で遊んだ後は、麻布の自宅に戻って、ホームパーティーという生活が連夜続いていた。

バロン西とウラヌス号の運命的な出逢い

ウラヌス号との運命的な出逢いは、ロス五輪に共に出場した恩師の今村安少佐がイタリア馬術留学時に、イタリア人も乗熟せない豪快な馬に出逢ったという話に始まる。この馬の話聞いた西中尉は、世界最高の名馬を求めて、イタリアへ半年の休暇を貰って横浜港から日本郵船の「浅間丸」で出航した。ロス五輪の2年前のことである。昭和5年（1930）3月、アングロノルマン種10歳の驕馬「ウラヌス号」と出逢う。

大柄で荒々しい奔馬は、イタリア陸軍の騎兵中尉の所有馬だが持て余していた。西は見た瞬間、私が探し求めていた馬はこれだ！と、一目惚れ。

しかし、陸軍の予算は下りず、かなりの高額ながら自費で購入した。さっそく、ウラヌス号と共にヨーロッパ各国の馬術大会に転戦した。ウラヌスが障害飛越の際に、踏切線が近いと前肢を衝突させる欠陥を見抜いた。踏切線が遠いと非常に好調に飛越することに気付いた。以後、数々の好成績を残して自信を深め帰国した。

ウラヌス号は、フランス産のアンブロ・ノルマン種の栃栗毛である。重種馬のノルマン種に軽種馬のサラブレッドやアラブ種を掛け合わせた中間種だが、その配合割合で個体のサイズが変わる。ウラヌス号の体高 181 c m（平均 160 c m）の大柄な馬であった。額には星印があるため「天王星」を指す「ウラヌス」と名付けられた。見事な体躯の馬だが気性が激しく、西の思うように調教は進まなかった。

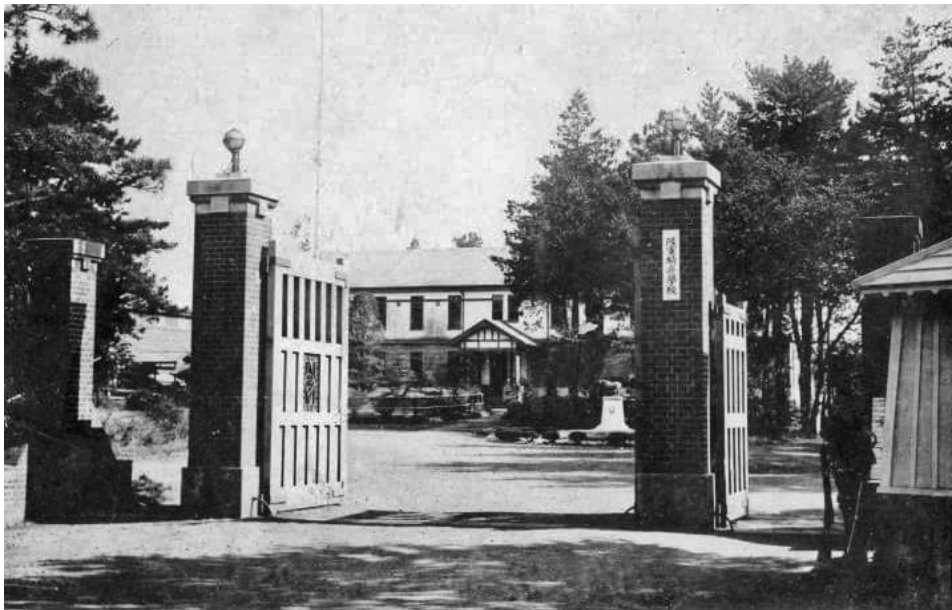
それでもロス五輪 2 年前、西中尉はこのウラヌスと共に、ヨーロッパ転戦で好成績を残し、非凡な飛越能力の馬であることを実証した。ヨーロッパから帰国した西中尉は、東京世田谷の騎兵第一連隊に戻り、「ウラヌス号」は、千葉県習志野の陸軍騎兵学校の厩舎に預けられた。西中尉は、その間の行程 40 キロを毎日調教と練習に通い詰めた。



「ウラヌス号」の一番の欠点は、飛越中に簡単な横木障害を前脚に引掛けて落とす悪い癖があった。本来、障害物を飛越するときに、馬は前肢を折って飛越するが、ウラヌスは前肢を伸ばした格好で飛ぶ。この姿勢で障害物に引っ掛かると人馬転倒はまぬがれない、人も馬も相当な勇気のいる飛越スタイルであった。このため、オリンピックの出場馬としてもう一頭、「愛蘭土号」(アイルランド)が用意されていた。

こちらにも欠点があり、飛越競技で障害が次々と増すに従い、眼の色を変えて興奮して入れ込む。西中尉はこの二頭を、それぞれの特性に合わせた調教に専念した。昭和6年(1931)4月28日、オリンピックに向けた国内一次予選は、習志野原と中山競馬場との間の一般道路を使って行なわれた。10月には陸軍騎兵学校で二次予選が行なわれ、それぞれ出場将校と騎乗馬が決定した。2頭ともパスしたが「愛蘭土号」が直前の怪我で辞退、ウラヌス号が本番に向けたロス五輪出場馬となった。

習志野陸軍騎兵学校正門



西竹一は、馬術に専念するために習志野の陸軍騎兵学校に入学する。そのとき既に1m75cmの身長と70kgの体重があり、柔道と剣道の有段者であった。特に腰幅が人並みはずれて広く、足が長く、脚力が非常に強い、馬に乗るには理想的な体型をしていた。バロン西の有名な写真に、オープンカーを楽々と飛越している福東号の写真がある。それは一旦、馬がその脚をクライスラーの車体に引掛ければ、人馬転倒の大惨事となる。しかし、万事派手好みで、ショーアップの大好きな西は、人を乗せた車の演出に十二分な技能の修練と自信に満ちていた。



彼の馬術に関する多くのエピソードの中に、陸軍騎兵学校の学生の頃、アイルランド産のハンター種アイリッシュ・ボーイ号に騎乗して、2m10cmという劇的な飛越を記録した写真である。その時代の世界で2m以上の障害飛越を記録した騎手は、10人に達してない、我が国初の快挙である。令和5年(2023)現在まで、高障害飛越の日本記録である。



その昭和初期の習志野の陸軍騎兵学校には、日本を代表する馬術の名教官達がキラ星の如く存在した。遊佐幸平中佐は、フランスのソーミュール騎兵学校に官費留学した逸材で、馬場馬術では「馬術の神様」と言われ、のロス五輪の馬術選手団総監督となる。



日本馬術の父 遊佐幸平（1883～1966）

ソミュール騎兵学校は、レコール・ド・ソミュールと云われる。フランス国王ルイ15世の命で、1763年フランス騎兵隊の再編成を仏国中部ソミュールの地（ココ・シャネルの生誕地）に、士官学校を創設したことに始まる。この騎兵学校に閑院宮載仁親王が留学したのを始め、日露戦争で騎兵を縦横に指揮して、ロシア軍コサック騎兵を破り「日本騎兵の父」と呼ばれた秋山好古など多士済々の顔ぶれが学び、日本馬術の礎を築いた。

フランス国立ソミュール乗馬学校



日本の陸軍は、普仏戦争で敗戦した仏国の陸軍方式をドイツ方式に変更した。だが、陸軍騎兵だけは秋山好古の意見を取入れて、フランス式を堅持した。ゆえに、日本の馬術界はフランス式が主流で、現在も馬具や騎乗に関する用語に多くのフランス語が残されている。西中尉は、スタイルも精神も大変にお洒落れで、フランスのエルメスの馬具、エルメス特注の長靴を履き、拍車も鞭もフランスや英国の特別製を好んで使用した。

第 10 回ロサンゼルス・オリンピック大会

第 10 回ロス五輪大会は、昭和 7 年（1932）7 月 30 日に開会した。馬術競技の出場馬は、1 ヶ月近い貨物船の船旅でアメリカに向かった。日本馬術チームは、大会 2 ヶ月前の 5 月 28 日、各国中ロサンゼルスに一番乗りで到着した。

この年は、前年の満州事変で国際的孤立に向かっていた。5 月前には、5・15 事件、東北地方では、飢饉、要人テロなどで国内は騒然としていた。

国内外ともに暗雲が垂れ込める中、昭和 6 年（1931）の東京市議会では、昭和 15 年（1940）に第 12 回オリンピック競技大会を東京で開催する招致決議案を満場一致で可決している。第 11 回ベルリンオリンピック大会の開催は、すでに決定している。そこで第 12 回東京オリンピック大会に向けて、勢いをつけるべく、ロサンゼルス大会には主催国アメリカに次ぐ、192 名の役員、選手団を送り込んだ。

馬術競技の監督選手 7 名

監 督	騎兵大佐	遊佐幸平	
総合馬術	騎兵中佐	城戸俊三	久軍号
総合馬術	騎兵大尉	山本盛重	錦郷号
総合馬術	砲兵大尉	奈良太郎	孫神号
大障害飛越	騎兵少佐	今村 安	ソネボーイ号
大障害飛越	騎兵大尉	吉田重友	ファレーズ号
大障害飛越	騎兵中尉	西 竹一	ウラヌス号

ロサンゼルス・メモリアル・コロシウム



昭和7年(1932)8月14日快晴、第10回ロサンゼルス・オリンピックが開幕した。西竹一騎兵中尉と今村安少佐は、大会の最終種目を飾る「大賞典障害飛越競技(グランプリ・デ・ナシオン)」に出場した。馬術競技の中で、最も高難度で華麗な競技で「オリンピックの華」と呼ばれている。

その名誉に相応しい、オリンピック種目の最終日を飾る競技として、メインスタジアムで行われるのが恒例であった。この競技は軍人で構成され、国別と個人で競い合う。国の威信をかけた勝者こそ、真のオリンピック勝者であると、賞賛されていた時代である。

まだ、陸上競技の興奮が冷め遣らぬ会場は、11万の大観衆で埋め尽くされていた。最終競技の「馬術大賞典障害飛越競技」に、アメリカ、メキシコ、スウェーデン、日本の4カ国11組の人馬による決勝戦である。

飛越コースは、スタジアムを縦横に使った全長1,050mに、高さ1.6mの大小19障害が配置されている。この屈指の高難度に配列された経路のため、大荒れの試合展開が予想されていた。午後2時30分、大障害飛越競技の人馬がスタートする。



- ①番は、メキシコのボカネグラ大尉。2個の障害を落下、第8障害で3回拒止して失格となる。
- ②番は、地元アメリカのウォフォード中尉、彼も4個の障害を落下、第10障害では3回拒止で失格となる。
- ③番は、日本の今村安少佐、4個の障害を落下、第10障害で3拒止と落馬で失格となる。
- ④番は、スウェーデンのフォン・ローゼン中尉、彼も4個の障害を落下したが、初めて全コースを走破して、減点16でゴール、大観衆の喝采で迎えられた。
- ⑤番は、メキシコのメジャ少佐、彼は第2障害で3回拒止して失格となる。
- ⑥番は、地元アメリカのブラッドフォード大尉、6個の障害落下で24点の減点で全コースを走破した。
- ⑦番の、吉田重友少佐は、練習中の負傷で病院入院中で棄権となる。

⑧番は、スウェーデンのフランケー中尉、彼は優勝の呼び声高かったが、2個の障害落下、第10障害で3回の拒止で失格となった。この時点の失格者続出で、団体戦が不成立となった。



一国3名の選手による合計点が第1位の国には、特別に「グランプリ・デ・ナシオン＝優勝国賞典競技」という名誉が与えられる規定があった。つまり、「優勝国」争いは無くなり、後は「個人優勝」の戦いとなる。

⑨番は、メキシコのオルチッツ大尉、彼も落下や拒止で失格となる。

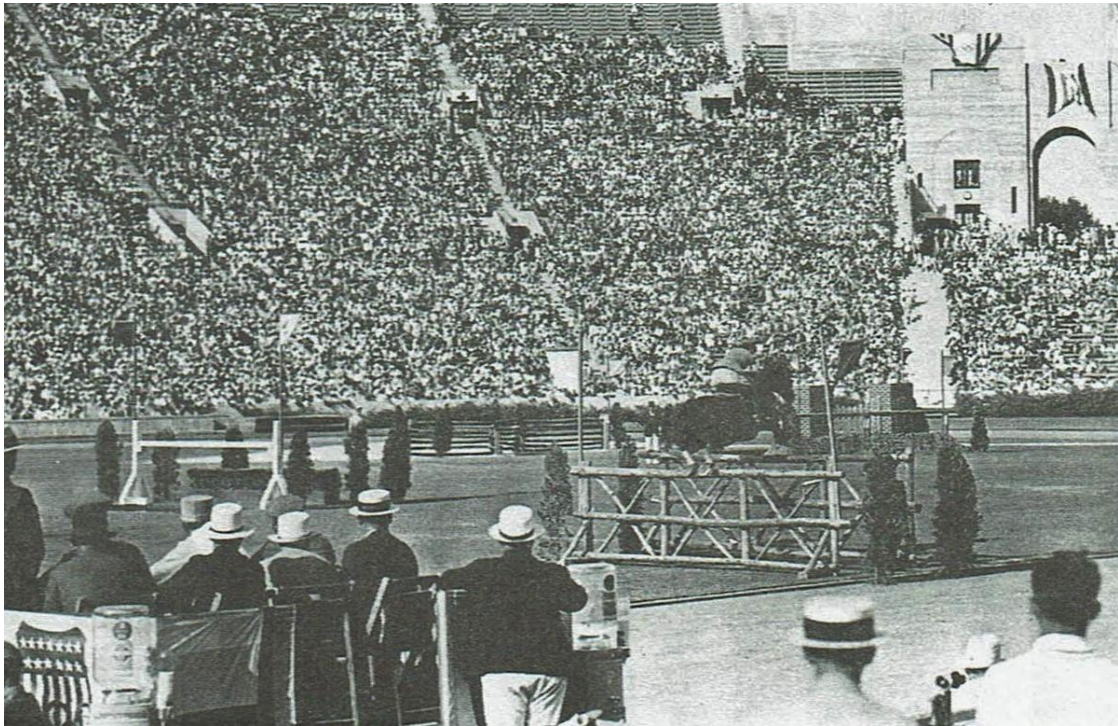
⑩番は、アメリカの監督チェンバレン少佐、アメリカ選手で最も期待された騎手、葦毛のショーガールを駆使してスタンドの期待を一身に集め、飛越するたびに万雷の拍手と喊声が起こる。第5障害落下、第6と第13障害で水濺に肢を踏み入れ、12点の減点でゴールした。これまでの素晴らしい成績で、誰の眼にも彼が優勝の栄冠を得たと確信した。

後に残る騎手は、スウェーデンのハルベルグ大尉と日本の西中尉の2名である。どちらも前評判では、格落ちとされていた。このとき、日本選手団監督の遊佐幸平大佐は、オリンピック史上初の日本人審判員に選出され、審査台上席で、祈るように西中尉の一挙手一投足を見守っていた。



⑪番は、西中尉の騎乗するウラヌス入場すると、その巨体に観衆からは感嘆のざわめきが起こる。西中尉は、落ち着いた駈歩で競技場を一周、スタートの合図の旗が下ろされる。第1障害は、歩調整齊で流れる様に飛越。第2障害以降も、ウラヌス独特の大きな間歩で、力強く飛越した。

第6障害は、幅5尺の水濠で後肢を水中に落とす。難関の第8障害のバンケットは、苦もなく突破、第10障害は、他国の選手が涙を吞んで失格した最難関。ユーカリの枝を積み重ねた上に更に横木が置かれていた。



ウラヌスは、その異様さに驚き、左へ切るように拒否して止まった。その瞬間会場からは諦めのどよめきが起こった。だが西中尉は、素早く反転すると、馬首を再び障害に向けた。今度は、思いきり高く上に飛び、ウラヌスは腰を右にひねり、横木との間に十分な余裕を残して飛越した。残りの障害をすべて飛越してゴールインすると、観衆は総立ちで、万雷の拍手が湧き起こった。8減点で見事、第1位に立つ。

最後⑫番は、スウェーデンのハルベルグ大尉、障碍の落下と拒止にタイムオーバーの50点減点で熱戦は終了した。(馬術は減点方式で採点、減点数が少ない方が勝ち)

完走は、11選手中わずか5選手。慎重な審査のあと「第1位日本・西中尉。減点8」と公式発表があり、この瞬間、観衆は万雷の拍手で優勝を讃えた。狂喜した同胞は「万歳」「万歳」の絶叫が鳴り響いていた。



西中尉は、審査台上の遊佐監督の許へ走り寄った。遊佐大佐は体をかがめ、大きな手を差し延べて「おめでとう」西中尉と固い握手で二人の目には光るものがあった。場内のアナウンスが、優勝者の名前を高らかに告げる。「ファースト・ルーテナント・バロン・タケイチ・ニシ」再び、ウラヌス号に騎乗した西中尉は、2位のチェンバレン少佐と3位のローゼン中尉を従えて表彰台に立った。

大日章旗がメインポールに翻ると、満場起立するなか500人の大バンドが奏でる国家「君が代」が、メインスタジアムの観衆に響き渡った。新聞記者が詰めかけると、英語が堪能な西中尉は、一言「ウィ・ウォン (We Won)」と答えた。最後の障害でウラヌス自ら、後足を横にひねってクリアしたこともあって、自分と愛馬ウラヌスの「We」の意味であった。

だが、日本の記者達は、それを解せず「我々日本は勝った」と打電した。たちまち世界の英雄、西男爵「バロン・ニシ」の名が駆け巡る。ロスの市長は、彼に名誉市民の称号を贈り、ロス郊外に建設する競馬場の起工式にも招待された。最上段に坐らせ、競馬会長から終身名誉会員の推薦状と感謝状が贈られるなど、歓迎攻めにあった。

バロン西の凱旋

優勝から8日後の8月22日に西中尉は盛大な見送りを受けて、日本郵船の秩父丸でロスのサンペトロ港を出港した。9月8日に横浜港に着くと、特別凱旋列車で東京へ向かう。東京駅丸の内口では歓迎の旗の波で埋まり、万歳の叫びと拍手に包まれた。大日章旗を持つ西中尉を先頭に遊佐監督以下、全員に用意された馬に騎乗して二重橋まで大パレードを行なった。



昭和 11 年（1936）8 月、西中佐はベルリン五輪に 17 歳の高齢となったウラヌス号とアスコット号で再び出場した。ウラヌス号で障害飛越個人 20 位、団体 6 位、アスコット号で総合馬術個人 12 位と不振であった。その後、騎兵学校の教官などの役職を経て、本来の職務である軍人として第一線に復帰した。バロン西も軍事力の変化で騎馬から戦車に乗り換えることを余儀なくされた。

昭和 19 年（1944）西竹一 43 歳のとき、本土防衛線の硫黄島を死守するため、北満州から硫黄島に移された。翌昭和 20 年 2 月 16 日、米大艦隊の艦砲射撃で島の地形が変容する中、米軍から「バロン西、あなたを失うのは惜しい、出てきなさい」と投降勧告もあった。だが彼は拍車と鞭を最後まで手離さず、ウラヌス号の鬣（たてがみ）を胸に忍ばせたまま玉砕した。

そして、西の後を追うかの如く、1 週間後にウラヌス号も世田谷の馬事公苑の厩舎で静かに息を引き取った。戦後、硫黄島の地下壕から西竹一愛用の長靴に着けていた拍車が発見され、西家で大切に保管している。また死ぬまで胸ポケットに入れて離さなかったウラヌス号の鬣が、平成元年（1990）米国で発見された。西家の遺族に渡され、軍馬鎮魂碑のある北海道の歴史資料館に保管されている。

ウラヌスの蹄鉄を四隅に配したロス五輪優勝額

上からオリンピック馬術唯一の金メダル、賞状、参加メダル（秩父宮記念スポーツ博物館所蔵）

馬術競技は、動物と供に行なう唯一のオリンピック競技であり、男女の区別なく同条件で実施される唯一の競技で



もある。馬場馬術（歩様の正確さと演技の美しさ）、障害馬術（飛越の正確性と走行時間）、総合馬術（馬場馬術と障害馬術に耐久のクロスカンントリー走行）の3種目が行なわれる。

古来より、馬ほど人間と強い絆で結ばれた動物はない。馬は人に対して、犬のように馴れ馴れしく振る舞うわけでもなく、猫ほど素っ気ない訳でもない。大きな馬体の中に犬とも猫とも異なった深い魅力を湛えている。馬は人間に何かを考えさせ、人間の快感を内側から絶妙に刺激する。その魅力は恐らく、馬と人間との悠久の歴史の交わりが生み出した共鳴し合う作用であるに違いない。